ユダヤ人ブンドにおける新たなユダヤ民族アイデンティティの創出

川　名　隆　史

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第 8 号　抜刷
2023 年（令和 5 年）3 月 20 日

ユダヤ人ブンドにおける新たなユダヤ民族アイデンティティの創出

川　名　隆　史

The Creation of a New Jewish Identity in the Jewish Bund

KAWANA, Takashi

Abstract

In the autumn of 1897 the General Jewish Labour Bund in Lithuania, Poland and Russia (shortly the Jewish Bund) was founded as the first party of Jewish socialist workers in Lithuania.The Jewish Bund aimed at the revolution in the Russian Empire from the standpoint of internationalism. After that, due to various factors, it changed to a Jewish labour party, which raised the national demands of the Jewish workers, and created a new Jewish identity corresponding to the modern class society.
This paper clarifies this process by examining the following three elements into details.
(1) The process of transition of Polish Jewish Identity since the eighteenth century
(2) The history of revolutionary movements in the Russian Empire and Russian Poland
(3) The polemic over the national question in the Marxist world of the time
The Jewish Bund survived the First World War and played an important role in restored Poland, but virtually ceased to exist after the Holocaust.

Keywords: the Jewisch Bund, Polish Jews, Jewish identity

目　次

はじめに
1章　ポーランド分割後のポーランド・ユダヤ人の世界
2章　革命運動の進展とユダヤ人ブンドの成立
3章　ユダヤ人ブンドの民族理論の形成
4章　ユダヤ人労働者の新たな民族アイデンティティ
結び

はじめに

1897年の秋，リトアニアのヴィルノで「ユダヤ人ブンド」（リトアニア・ポーランド・ロシアのユダヤ人労働者総同盟Algemejner Jidiszer Arbeter Bund in Lite, Pojln un Rusland）[1] が結成された。初のユダヤ人独自の社会主義的革命政党ユダヤ人ブンドの創立は，近世以降のユダヤ人アイデンティティの変遷の歴史に，また新たな転換をしるすことになる。

本稿は，18世紀中葉から進展した，旧ポーランド・リトアニア連合国家（ジェチポスポリタRzeczpospolita）のユダヤ人のアイデンティティの変遷に関する一連の研究の一部を成す。[2] ジェチポスポリタは当時，世界最大のユダヤ人人口を抱えた広大な国家であった。そのジェチポスポリタのユダヤ人社会の中で，18世紀中葉にハシディズムが発生した。神秘主義的な新たな信仰形式に基づくハシディズムは，ジェチポスポリタ南東部から急速に勢力を伸ばし，やがてジェチポスポリタのポーランド側の地域（ポーランド王国Korona）に広がり，旧来の支配的な通称「ラビ派ユダイズムjudaizm rabiniczny」すなわち「正統派ユダイズムjudaizm ortodoksyjny」の支配構造を切り崩し始めた。新たなユダヤ人アイデンティティの出現である。他方同時期にドイツ地域で，キリスト教社会への同化を進めるユダヤ啓蒙ハスカーラーの思想が生まれ，徐々にジェチポスポリタにもその影響が及び始めていた。ジェチポスポリタのユダヤ人（ひとまず簡潔にポーランド・ユダヤ人と表現する）は，大別すると数的な偏差はあるものの，正統派・ハシディズム・ハスカーラーの三方向に分化し，それぞれが宗教的，社会的な基盤に基づいて独自のアイデンティティの構築を進めていった。

ポーランド・ユダヤ人の社会は他方，「ポーランド分割」によって大きく変動した。分割によって，ポーランド・ユダヤ人の世界の地域的カテゴリーに変化が生じ，かれらは分割国ロシア，プロイセン，オーストリアのそれぞれの政治的・社会的条件の中で生きていくこととなった。各分割国の政治制度や対ユダヤ人政策の違い，経済発展の度合いに応じて，ユダヤ人社会内部の上述の区分けも国ごとの偏差を伴いながら進行した。

19世紀の末期に近づくと，ヨーロッパ各地で顕在化した反ユダヤ主義の風潮，特に1881-1882年のウクライナで発生した大規模なポグロムが，シオニズムの思想の意義を高め，それが新たなユダヤ理念，新たなユダヤ人アイデンティティとして影響力を強めて行った。また19世紀には資本主義発展に伴って労働運動が進展するとともに，マルクス主義を始めとする社会主義思想，革命思想が広まった。特に社会主義思想の解放理論が，ユダヤ人社会においても革命派のインテリゲンツィアや労働者の間に広まり，それがやがてユダヤ人解放の理論と関連付けられていった。同一の歴史的基盤に立ちながら，シオニズムとは別個のユダヤ人の解放のスタイル，更なる別個のユダヤ人アイデンティティが模索されることになる。

本稿の目的は，ユダヤ人の労働運動，社会主義的革命運動の中から生じた新たなユダヤ人アイデンティティ形成の動きを追うことにある。対象とするのは，19世紀末にロシア帝国とりわけポーランド分割によってロシア領となったジェチポスポリタのリトアニア側（リトアニア大公国）の地域でユダヤ人独自の革命党として生まれたユダヤ人ブンドである。ユダヤ人の労働運動・革命運動は他の分割領でも進展したが，ポーランド王国[3] も含めたロシア領のユダヤ人ブンドは，ユダヤ人自身の独立した党組織であったこと，またその影響力の強さ，歴史的な重要性の面で他の分割領の運動を遥かに凌駕した。第1次世界大戦後に復活したポーランド国家においても，ユダヤ人ブンドはユダヤ人の社会的・文化の発展を牽引した。

ユダヤ人ブンドは，また近代東欧の重要な課題である民族問題の歴史において，「民族的文化的自治」を綱領化したことでも異彩を放つ。「ユダヤ人は民族なのか？」という微妙な問題から，東欧の民族問題そのものの本質に関わるようなところにも，このユダヤ人ブンドの思想・行動の営為は関わっていた。本稿は，これまでのユダヤ人ブンドの研究史を踏まえ，[4] ユダヤ人ブンドが独自のユダヤ人アイデンティティを構築した経過を辿ることを目的とする。そこではユダヤ人ブンドそのものの思想展開を追うと同時に，ユダヤ人ブンドひいてはユダヤ人社会全般を取り巻く非ユダヤ人社会との関係，特に競合する他の民族の社会主義政党との関係を探りながらその経過を追うことにする。また同時にユダヤ人宗教共同体の中での葛藤・対立も，考察のもうひとつの素材として可能な限りで取り上げる。

1章　ポーランド分割後のポーランド・ユダヤ人の世界

ナロードニキの運動からロシア革命に到るロシア帝国の革命運動史には，多くのユダヤ人が登場する。だが彼らの多くは，ポーランド分割でロシア領となった地域でロシア化したインテリゲンツィアないしは実業家階層の出身者からなる。ロシア語を母語とし，ロシア語で高等教育を受けた彼らは，ユダヤ人としてではなくロシア帝国国民としてのアイデンティティを強く感じていた。従って，彼らの革命の目標はあくまでもロシア帝国の革命であり，ユダヤ人への特別の配慮があったとしても，それがユダヤ人独自の革命理念として顕在化することはなかった。1897年にユダヤ人ブンドを創立したユダヤ人革命家たちも，もとは概ねそのような風潮の中で活動していた。

ポーランド分割で旧ジェチポスポリタの最大領域を領土としたロシア帝国は，同時にそこに居住していた，ロシアにとっては未曾有のユダヤ人人口を抱え込んだ。対応に苦慮しながら対ユダヤ人政策を進めたロシア政府は，新たに領土となった地域を中心にユダヤ人の強制居住区域[5] を定めた。ユダヤ人強制居住区域は時代とともに拡張，縮小を繰り返すが，帝政末期にはおおよそ旧リトアニア大公国領域をなす北西諸県，現在のウクライナの北部の南西諸県，南部の新ロシアНоворосcия地域，それにウィーン会議によって成立したポーランド王国の領域から成る。旧ジェチポスポリタの領域に加え新ロシア地域が強制居住区域になったため，ユダヤ人にとっては居住域が広がったことになり，実際この地域でのユダヤ人人口は急増した。強制居住区域の一部でユダヤ人の農村居住が禁じられたこともあるが，歴史的な傾向としてユダヤ人は都市に集中する度合いが高い。近代化が進み，経済発展の過程で富裕化するユダヤ人も現れる。ロシア政府は彼らを優遇し，例外的に強制居住区域外での居住，経済活動を容認するようになる。強制居住区域内のユダヤ人の人口は，19世紀末には500万を超え，強制居住区域の人口の11％を超えた。[6]

本稿が対象とするユダヤ人ブンドの主な活動領域は，ロシア帝国の北西諸県（以下，リトアニアとする）とポーランド王国である。リトアニア人，ベラルーシ人，ポーランド人，ユダヤ人が混住するリトアニアでは，ユダヤ人の都市人口に占める割合は6割に達し，中小の都市では更に多い。圧倒的にポーランド人が優勢なポーランド王国では，ワルシャワ，ウッチといった大都市での居住が多いが，その人口の割合はせいぜい3割程度であり，リトアニアとは対照的である。

前述のようにハスカーラーの影響のもと，富裕ユダヤ人の同化，リトアニアではロシア化，ポーランド王国ではポーランド化，プロイセン領やオーストリア領ガリツィアではドイツ化が進行していた。だがこの同化の動きは，ほぼ大都市の富裕階層に限られ，大多数を占める中下層のユダヤ人は，概ね正統派とハシディズムの支配するユダヤ教世界の中にいた。そこにもやはり地

域的な差異があり，プロイセン領（後のドイツ帝国領）では，政府が推進した同化政策もあって明確にハスカーラーが優位であった。ガリツィアではハスカーラーの影響は大都市に限られ，中小都市や農村地域は正統派とハシディズムの影響下にあり，特にハシディズムが急速に勢いを増していた。ロシア領のポーランド王国も宗教関係ではガリツィアとほぼ同様といえるが，ガリツィアに比べてポーランド王国ではユダヤ人の人口規模が大きく，また工業発展が進んだことで経済的背景においてガリツィアとは大きな違いがあった。リトアニアはポーランド王国と並ぶ，ユダヤ人の集積地であった。リトアニアでは伝統的に正統派が強力で，ジェチポスポリタ南東部からのハシディズムの影響を最小限に抑えたため，それが宗教的環境におけるガリツィアやポーランド王国との違いを生んだ。ハスカーラーの影響は他の地域と同様，ヴィルノ，ミンスクなどの大都市に限られていた。[7)]

1850年代からロシア帝国でも工業発展が進み，ユダヤ人強制居住区域ではポーランド王国と南部の新ロシア地域で目覚ましい発展が見られた。リトアニアはそのような大工業化の流れからは立ち後れており，それがリトアニアのユダヤ人社会の経済的条件に影響した。旧ジェチポスポリタ時代から，ユダヤ人の職業は請負酒場経営や行商を含む小規模商業，手工業が優勢であり，ロシア領においてもその傾向は維持された。[8)] 工業労働についても大工場工業への進出は進まず，大半のユダヤ人労働者は中小の手工業に従事していた。[9)] この資本主義発展からユダヤ人労働者が取り残されたような状況は，ユダヤ人問題の現れとして政治的な主題に転化することにもなった。

2章　革命運動の進展とユダヤ人ブンドの成立

ロシア帝国の革命運動は，1890年頃を境にナロードニキの革命主義からマルクス主義的な労働運動を基礎とする運動への転換が見られ，この運動に多くのユダヤ人が関わるようになる。活動の中心はリトアニアで，特にヴィルノが拠点であった。彼らは本来的に民族の違いを重視しない理論的立場で活動した。具体的には，もっぱらロシア語でロシア人（ロシア語を解する他の民族の労働者も含む）労働者を対象に活動した。このため，イディッシュしか解さないユダヤ人労働者の間での活動は困難であった。しかしリトアニアの労働者階級に占めるユダヤ人労働者の比重は高く，このユダヤ人労働者への働きかけが重要なことは認識されていた。こうしてユダヤ人労働者を対象にロシア語教育および様々な教化活動を内容とする活動が始まり，やがてイディッシュが教化活動に併用されるようになり，活動は小規模な革命家サークル形成から，1890年代初頭を境により広い層を対象とする革命的な労働運動へのアジテーションへと展開する。

この時期にヴィルノのグループはポーランド王国，特に首都ワルシャワへ活動家を送り込み，活動領域の拡大を目指した。1890年代に入り，パリで亡命ポーランド人革命家組織「ポーランド人社会主義者在外同盟」Związek Zagraniczny Socjalistów Polskich（ZZSP）が結成され，その影響下にポーランド王国およびリトアニアのポーランド人の革命組織として「ポーランド社会党」Polska Partia Socjaiistyczna（PPS）が結成された。[10)] ポーランド独立と社会主義的労働運動を綱領としたPPSは，当初よりユダヤ人労働者を獲得することを重視していた。ポーランド独立がユダヤ人労働者にとって解放への意義ある道筋と認識した者が多くPPSに合流し，党内にユダヤ人部門が出き上がる。PPSのポーランド人指導者のみならずユダヤ系インテリゲンツィアの指導者でさえ，そのほとんどがイディッシュを解さなかった。[11)] ユダヤ人部門は必然的に自律的に行動する。党指導部にはユダヤ人を独立した民族とする視点はなく，[12)] イディッシュの意義も認めていない。[13)] 党内部に独自の方針を掲げる民族的な独自組織が存在することは想定していなかっ

た。ユダヤ人党員の側にもそのような意識はなかったし，まだその時期でもなかった。しかしユダヤ人労働者間でのアジテーションの戦術面で，徐々に党指導部との認識の違いが現れ，それが党指導部とユダヤ人部門の間に軋轢を生むことになり，[14] 1897年に組織的に分離する。[15] この時点では，ユダヤ人部門はユダヤ人独自の民族的要求を掲げてはいないが，ユダヤ人ブンドが生まれる世紀転換期に向かって様々な形でそれが運動の重要なテーマとなって行く。ユダヤ人の社会主義運動に民族問題が持ち込まれるのである。ヴィルノのユダヤ人グループにとっては，ポーランド人の民族としての目標であるポーランド独立の綱領にはあまり関心はなく，ワルシャワのユダヤ人組織もポーランド独立の綱領よりはむしろポーランド人労働者との合体による運動の強化に関心が強く，「ヴィルノの使者」の活動が広まるにつれ，多くのユダヤ人労働者がその影響下に入った。PPSとヴィルノ・グループの間でユダヤ人労働者の争奪戦となり，両者間で運動の戦術面のみならず，PPSのポーランド独立の綱領をめぐって民族問題に関する議論が激化した。ポーランド王国にはポーランド独立の綱領を否定してPPSに対抗する「ポーランド王国社会民主党」Socjaldemokracja Królestwa Polskiego（SDKP）が，1893年に結成されていた。ポーランド王国とリトアニアの労働運動は，戦術的，民族的に，加えて激しい弾圧のためにそれぞれの党組織が浮沈を繰り返したため組織的にも錯綜した状況の中で展開されていた。

やがてロシア帝国の労働運動において，ユダヤ人労働者を束ねる統一組織の必要性が認識されていった。1895年以降，弾圧によってPPSの活動力が低下したことなどにより，ワルシャワではポーランド問題に関する見解の相違を争点とすることなく，ヴィルノ・グループとPPSから分離したユダヤ人部門が合体していた。そのことが重要な誘因のひとつであったと思われるが，1897年10月，ヴィルノにヴィルノ，ワルシャワなどの組織の代表が集まり，ロシア帝国のユダヤ人労働者の統一組織としてユダヤ人ブンドが結成された。ユダヤ人ブンドは，ロシア帝国全体の社会民主主義に基づく労働運動の中でユダヤ人の運動を束ねる組織であり，ロシア帝国全域のすべての民族の労働者の組織として生まれるはずの社会民主主義党の一部であるとあらかじめ自己規定していた。そしてそれが翌年の「ロシア社会民主労働党」（以下，ロシア社会民主党）の創立により現実化する。ミンスクで開催された創立党大会の参加者7名のうち2名がブンドの代表で，そこで選出された3名の中央委員のうち1名がブンドの代表であった。創立されはしたもののその直後から弾圧が強まり，もとより弱体であったロシア人の運動は細り，特にリトアニアおよびその周辺では，ロシア社会民主党の運動は専らユダヤ人ブンドによって担われていた。その実績に基づく高い自意識が，やがてロシア社会民主党内部の組織問題を混乱させる要因のひとつとなった。

1897年の結党以降，ユダヤ人ブンドはほぼ毎年党大会や党会議を開き，綱領方針を具体化，精密化して行った。社会民主主義の政治的アジテーションとともに，労働運動において特に重視されたのは，労働者の権利獲得，待遇改善などのいわゆる経済闘争であり，この側面においてユダヤ人ブンドは競合する他党を凌駕していた。ユダヤ人ブンドは自らをロシア帝国全体のロシア社会民主党の一部と位置づけていたため，全体党内での自党の位置，他の民族の党員との関係を規定することを迫られた。帝国内の運動をユダヤ人ブンドが専ら担っていた時期には問題にはならなかったが，レーニン等「イスクラ」派を中心にロシア帝国内および亡命地での党活動が活発化し，ロシア社会民主党の再編成を目指して第2回党大会が準備された時に，問題が顕在化した。ユダヤ人ブンドが，自身をユダヤ人労働者の唯一の代表で，ロシア社会民主党の「連盟的federalny」な構成部分だとした[16] のに対して，レーニン等はそれを「民族主義的偏向」「分離主義」として攻撃した。[17] 党大会準備段階で活発な議論がなされたが，最終的に両者は決裂し，ユダヤ人ブンドはロシア社会民主党から脱退した。この問題は，ユダヤ人ブンドvs.「イスクラ」派という対立図式

で，すなわちユダヤ人という特殊な存在のために発生した問題として論じられることが多い。だが，ユダヤ人ブンドと同様に当初よりロシア社会民主党の一部と自らを位置づける「ポーランド王国・リトアニア社会民主党」Socjaldemokracja Królestwa Polskiego i Litwy（SDKPiL）[18] も，組織問題に関してユダヤ人ブンドと同様の要求を掲げて「イスクラ」派と対立した。問題はロシア帝国やオーストリア・ハンガリー国家のような多民族国家で，社会民主主義の運動がいかなる形式のもとに展開されるべきかという，原理的な問題であった。SDKPiLはユダヤ人ブンドに同調していたわけではないが，結果的にユダヤ人ブンドと同じ方向に進み，ロシア社会民主党と合体はしなかった。[19] この対立の背後にはまた，ユダヤ人問題一般に関わるある偏見が横たわっていた。「イスクラ」派に限らず，当時の社会主義者世界において，一般にユダヤ人が民族と見做されていないという事実である。詳しくは次章以後で扱うが，ユダヤ人はやがては周囲の社会に同化してゆくものという，進化論的な響きのハスカーラーの世界観が社会主義者世界にも根強く染み込んでおり，それがレーニン等「イスクラ」派の主張の底流を成していた。思想・原理の面ではユダヤ人の存在は認められないが，現実の運動においてはユダヤ人が重大な推進力を有している。レーニン等「イスクラ」派の頑なな拒否的な態度は，この矛盾した状況にも起因するだろう。

ロシア全体党との関係のみならず，特に民族問題をめぐるPPSとの議論など，多様な要因，状況から，ユダヤ人ブンドは結党以降，徐々にユダヤ人を独自の民族と規定し，それに基づく独自の民族的要求を具体化していった。ユダヤ人ブンドは本来，革命運動における民族の違いを度外視する国際主義の立場に立つ。従ってこのような民族的要素を強調する方向への転換には，当然，党内からの反発があり，激しい論争もあった。しかし結果的に，ユダヤ人を「民族」と確定し「ユダヤ人の民族的文化的自治」をユダヤ人労働者の要求として綱領化するに到ったことで，ユダヤ人ブンドは社会民主主義の革命運動史において歴史的な個性として自立した。この転換の要因，具体的なプロセスについても，次章以降で詳述する。

20世紀に入るとロシア帝国全体で，社会主義運動に限らず様々なアジテーションが活発化し，政治的に活性化する。ポーランド人の間ではSDKPiLの組織が再建され，PPSと競合した。ユダヤ人ブンドはポーランド独立を綱領とするPPSには敵対し，理論的に親和的なSDKPiLと協調する傾向があった。しかしそれらは機関誌などでの論争に限られ，日々の労働運動の現場では，民族問題よりも経済闘争が重視された。独自のユダヤ人組織を有するPPSとは競合するものの，SDKPiLとは，ユダヤ人ブンドがユダヤ人，SDKPiLがポーランド人を活動の対象とすることで事実上の分業が行われていた。同時にPPS内部では，ポーランド独立の綱領方針の解釈をめぐり，また労働運動の活動方針をめぐって理論対立が生じていた。1900年にPPSから分かれたPPS-Proletariat[20] は，ポーランド独立を目標としつつも，ロシア帝国の革命と諸民族の自治・連邦の要求を掲げ，またユダヤ人独自の革命党の意義も認めていた。ユダヤ人の民族的文化的自治を綱領化しつつあったユダヤ人ブンドとPPS-Proletariatの親和性は強く，両党は協力関係にあった。[21]

他方ユダヤ人自体の運動面でも状況に変化があった。ユダヤ人ブンドはPPSのユダヤ人組織と競合関係にあったが，1900年頃からロシア当局による官製労働運動（ズバトフシチナ зубатовщина）[22] が現れ，やがてそれがユダヤ人労働者を対象とし始めた。ユダヤ人自身の中でも，革命的組織による激しい政治的アジテーションに懐疑的なグループもあったようで，温和な合法的活動への志向も一定の成果を生んだ。1905年革命でロシア帝国の労働運動は一つの頂点に達するが，ユダヤ人ブンドにかかわるところでは，二つの大きな変化があった。一つはユダヤ人の労働運動にシオニズムが浸透し，いわゆる労働者シオニズムないし社会主義シオニズムと呼ばれる運動が生まれたことである。[23] 社会主義実現のための前提としてのユダヤ人国家を目指すこのシオニズムは，そ

の実現のあり方をめぐって見解の相違があって，決して一枚岩ではなかった。しかしユダヤ人労働者の間にかなりの影響力を持つに到り，シオニズムを否定するユダヤ人ブンドの新たな敵対勢力となっていた。もう一つはユダヤ人ブンドがSDKPiLとともにロシア社会民主党と合体したことである。ロシア社会民主党第2回大会での決別の原因であったロシア全体党の組織論の問題は解決されないまま，1905年革命の熱狂の中で，社会民主主義の革命運動の統一の要請からなし崩し的に合体が実現した。[24] これ以後，ポーランド王国やリトアニアでは，ポーランド語やイディッシュのパンフレットやビラには三党の名称が併記された。この全体党においては，SDKPiLはボリシェヴィキに，ユダヤ人ブンドはメンシェヴィキに近寄る傾向が強まり，1912年のウィーンの反ボリシェヴィキ派の会議以降，ユダヤ人ブンドは事実上メンシェヴィキ内の自治部門となった。[25] また1905年革命によってPPS内部でも，ポーランド独立に戦いを一元化させるグループと，社会主義運動を重視するグループの対立が深まり，最終的に前者が「ポーランド社会党革命派（PPS-Frakcja Rewolucyjna）」，後者が「ポーランド社会党左派（PPS-Lewica）」となってPPSは最終的に分裂した。後者のPPS-Lewicaと，ユダヤ人ブンド，SDKPiLとの距離が縮まり，一部で協力関係に入った。おおよそこのような経過を辿って，第一次世界大戦そしてロシア革命，ポーランドの独立を迎えることになる。第一次世界大戦でポーランド王国が同盟国軍に占領されたため，ユダヤ人ブンドの組織はポーランド王国とリトアニアの間で遮断された。その後更にロシア革命でロシアに社会主義政権が生まれ，またポーランド国家が再建されてポーランドとロシアが国家的に分離したことにより，ユダヤ人ブンドの存在条件そのものが大きく変化して，組織的にも理論的にも新たな時代に入る。ロシア革命の中でロシアとリトアニアの組織の大部分はロシア共産党に吸収されて解消され，ポーランドの組織からロシアに移った者もいた。党内対立を経て，[26] ロシア共産党・コミンテルンと距離を保ったポーランドの組織は「ポーランドのユダヤ人ブンド」の名称の下，ポーランドの党として再出発した。

3章　ユダヤ人ブンドの民族理論の形成

ユダヤ人ブンドは1899年12月の第3回党大会で，初めて民族問題すなわち社会主義運動におけるユダヤ人の問題を取り上げた。前述のように，ユダヤ人ブンドはユダヤ人独自の民族的要求は掲げず，他の諸民族と共同でロシア帝国の革命を目指すいわゆる国際主義に依拠していた。ユダヤ人ブンドという党も，本来はユダヤ人を民族として代表する組織ではなく，帝国全体の運動の中でユダヤ人の運動を推進するための組織として構想されたものだった。従って1899年の時点で民族としてのユダヤ人独自の政策を志向するに到ったことは，ユダヤ人ブンドの歴史における大きなイデオロギーの転換といえる。この転換には，ユダヤ人組織の拡大によるメンタリティの変化，他の社会主義党，特にポーランドにおけるPPSとの対抗，あるいは第二インターやオーストリア社会民主党における民族問題をめぐる様々な議論など，多くの要因が関わっていた。

ユダヤ人ブンドが第3回大会で，民族としてのユダヤ人の問題を議事日程に取り上げた理由については，研究史上，様々な見解が取りざたされるが，ここではまずPPSのポーランド独立の綱領への対抗という要素を重要なものと指摘しておく。ユダヤ人ブンドは経済闘争において実績を重ね，多くのユダヤ人労働者を獲得してきた。だがポーランド民族がロシア帝国の支配から脱してポーランド国家を樹立して自由を実現するという図式は，同じ土地に住み歴史を共有してきたユダヤ人にとっても，普遍的な意義を持つ解放の理論として認識されていた。PPSユダヤ人部門（後のユダヤ人組織Organizacja Żydowska）としてPPSに属するユダヤ人のメンタリティはそこにある。

だがPPSはリトアニアを含むポーランドの独立を一元的にポーランド人によるものとし，その領域内のユダヤ人（リトアニア人も同様）はポーランド人として一元化され，独自の民族としては認められていない。ユダヤ人はユダヤ人としてではなく，ポーランド人として（あるいはポーランド人になるものとして）扱われ，従ってアジテーションも専らポーランド語で行われた。

ポーランド独立の問題は，PPSとの関係に留まらない。ポーランド独立の要求を否定するSDKPが創設され，ポーランドの労働運動の世界が二分されたこと，更には1896年の第二インター・ロンドン大会でPPSおよびその在外機関ZZSPと，SDKPの双方が自身の立場に国際的な承認を得ようと，ポーランド独立をめぐって相反する決議案を提出したことで，すでにそれは国際問題化していた。ロンドン大会では，民族自決権Selbstbestimmungsrecht der Nationen（言語によっては自治autonomy）を認めるという決議をもって曖昧な形で決着がついた。しかしその過程で，ドイツ社会民主党の理論誌といえる“Die Neue Zeit”で，いわゆる「ポーランド論争」が展開され，[27] ポーランド独立要求の是非という議論を越えて，「民族」の定義も含め民族問題全般に関する議論が沸騰していた。加えて，第3回大会に先立つ1899年9月に，多民族国家オーストリアの社会民主党ブリュン党大会が開催され，オーストリアを民族自治を基盤とする諸民族連合国家へ改変するという，いわゆるブリュン綱領が採択され，当時ブルジョワ的と称されていたナショナリズムとは異なる形式で，民族が政治的主体と捉えられるようになっていた。[28] 更にこの頃，南ロシア方面に社会主義シオニズムのポアレイ・シオンPoalej-Syjonが生まれ，その勢いがポーランドに及び始めたため，それに対抗して民族としてのユダヤ人の要求を定式化する必要があった。

第3回大会では，様々なモノグラフの記述によると，民族問題に関してはかなり激しい議論となったようである。ユダヤ人の民族としての意義を強調したのは，数年前にワルシャワに潜入してユダヤ人労働者の組織活動の中心にいたミルJ. Millであった。ワルシャワで日常的にPPSと対峙した後，スイスに逃亡してブンドの在外委員会を率い，機関誌“Der jidiszer arbeter”（『ユダヤ人労働者』）の主筆であったミルは，オーストリア社会民主党のブリュン綱領の図式に則ってロシア帝国改編の方針の意義を説いた。しかしこのような民族的要素を強調することは，ユダヤ人労働者の階級意識を希薄にし，更にナショナリズムへの偏向を生み，国際主義に依拠するユダヤ人ブンドの本来の立場を損なうことになるという批判を受けた。[29] ユダヤ人の民族としての権利ではなく，普遍的な市民的権利の獲得こそが目指すべきものという立場である。PPSと直接対峙するポーランド王国のブンドにとって，ポーランド独立綱領に対抗して，民族問題において明確な立場を表明することは不可欠と捉えられた一方で，PPSの勢力が強くはなくロシア的性格の濃いリトアニアではポーランド独立の問題への関心は相対的に薄い。その温度差が党内の議論に影響を与えたことは考えられる。第3回大会では，この問題に関して決議はなされず，機関誌“Der jidiszer arbeter”に特別の欄を設けて自由な議論を進めることを決め，結論は次回以降の大会に持ち越された。[30]

1901年4月ビアウィストクでの第4回大会が，ユダヤ人ブンドにとって大きな転換点となった。大会は，SDKPiLと同調してPPSと全力で戦うことを再確認し，民族問題に関しては次のような決議を採択した。「様々な民族Nationalitätから成るロシア国家は，将来，居住する地域とは関わりなくそれぞれの民族の完全な自治volle Autonomieに基づく諸民族から成るFöderationに転換されねばならない。・・・この民族Nationalitätの概念は，ユダヤ人にも適用される。しかし現下の状況下においては，ユダヤ人の民族自治の要求を提起することは時期尚早であると考えられるため，今のところはユダヤ人に対する例外法の廃止を求めて闘うことで十分とする」。[31] 大筋において前回大会でのミルの主張が受容されたことになるが，ユダヤ人の民族自治を時期尚早としたのは，従

来の国際主義的な観点への妥協であろう。この決議の歴史的意義は，言うまでもなくユダヤ人を明確に「民族」と規定し，民族自治の主体と捉えたこと，そして民族自治の構想を，基本的に地域を基盤とするブリュン綱領の構想を越えて，地域を度外視する枠組みで提起したことである。[32]

ユダヤ人は「民族」なのかという議論は，マルクス主義者の間で当初は曖昧な形で，やがては過剰に厳密な理論の形で進展したが，ユダヤ人ブンドのこの決議がある刺激を与えたことは間違いない。東欧，西欧の区別なく，社会主義者の世界においてはハスカーラーの世界観すなわち同化論が暗黙のうちに認められていた。ポーランドにPPSが生まれて社会主義運動と民族的要求との関係が問題となり，オーストリア・ハンガリーでは多民族国家における社会主義運動のあり方が議論されるようになるが，ユダヤ人に関しては一貫して同化論が支配的であった。この問題に関する研究史では，ドイツ社会民主党のカウツキー K. Kautskyやオーストリア社会民主党のレンナー K. Renner，バウアー O. Bauerなどの名が引き合いに出され，様々な民族規定を含めてその内容は大概知られている。[33] たとえばバウアーによれば，民族を運命共同体・性格共同体とする自身の民族規定に従うとユダヤ人も民族であるが，それは古い中世のことで，近代の資本主義時代にあってはユダヤ人は周囲の諸民族に同化・吸収され，ユダヤ人の文化共同体は消滅するとされた。[34] 地域と言語の共通性を民族の指標とするカウツキーにとって，ユダヤ人は独自の地域を欠き，イディッシュは民族言語たりえず，従ってユダヤ人は民族ではない。[35] 極端に単純化したが，おおよそこのような議論が行われた。これはハスカーラーの歴史観への盲目的信頼と，西欧とは桁違いのユダヤ人が存在する旧ジェチポスポリタの状況への無知に起因する。だがこれは西欧のみならず，ロシアの社会主義者についても同様であった。ロシア帝国の革命運動には，多くのユダヤ人革命家が関わっているが，その大半はロシア化したユダヤ人で，彼らにとって他のユダヤ人はやがて自らと同じ道を歩むべき存在であった。ましてやレーニンを始め，ロシア人の革命家の大半はユダヤ人など眼中になかった。それどころかユダヤ人ブンド内部でも，やがてはユダヤ人は最終的に同化の道に進むだろうと考える者も少なくはなかった。このような風潮の中で，ユダヤ人ブンドが「ユダヤ人は民族である」と高らかに宣言したわけである。同化論が主流の社会民主主義の世界では当然のことながら強い反発は生じたが，ユダヤ人ブンドでは以後，既定路線となっていく。[36]

この決議はまた，ロシア社会民主党の組織原理に関わる問題も引き起こした。ロシア帝国を諸民族の自治に基づく連邦国家に改変するという目標は，そのままロシア社会民主党の組織原理に投影され，ユダヤ人ブンドの社会民主党からの脱退を引き起こした。おおまかな経過は第2章で示した通りであるが，要はユダヤ人ブンドがユダヤ民族の唯一の代表で，ロシア社会民主党の「連盟的」な構成部分であるという原則のもとに中央委員会に代表を送ることを要求したことで，イスクラ派のみならず後のメンシェヴィキの人脈からも，民族主義的偏向，分離主義だとして激しい批判を受けたのである。後にレーニンが明示したように，ロシア社会民主党はロシアの地域政党であり，民族原理に基づいてはいなかった。[37] ロシア全体党の「自治的部分」であったユダヤ人ブンドは，徐々に「ユダヤ人」の組織，すなわちロシア帝国全体のユダヤ人労働者の唯一の代表であるとの性格を強め，ロシア社会民主党内での他の民族の代表と同等の地位を求めたのである。党を民族ごとに区分けし，それぞれの代表が「連盟的」な関係のもとに指導部を形成するという，民族原理に基づく新たな党組織原理がユダヤ人ブンドからもたらされたのであるから，レーニン等からの反発はむしろ必然とも言えよう。

第4回大会で「時期尚早」のため綱領化されなかったユダヤ人の民族自治の要求は，1905年革命勃発後の，1905年10月の第6回大会で正式に「民族的文化的自治」の要求として承認された。そ

して裁判および公的機関における母語すなわちイディッシュ使用が法的に保障され，公的教育などの文化的事柄については，その権限が国家や地域行政機関から当該の民族へ，すなわち民族の成員によって選ばれた特別の機関に移行されるという要求細目が付けられた。[38] ユダヤ人は民族として民族的文化的自治の主体であり，イディッシュが事実上ユダヤ人の民族言語であることが，正式にユダヤ人ブンドの綱領となった。現地社会への言語的同化を唱えるハスカーラーや，ヘブライ語使用を志向するシオニズムに対抗して，イディッシュをユダヤ人の言語とするイディッシュ運動（イディシズムYiddishism）が19世紀から進展して，19世紀末頃には「イディッシュ・ルネサンス」と称されるようなイディッシュ文芸の発展が見られた。[39] イディッシュはユダヤ人労働者の大半が属していたであろう正統派ユダヤ教やハシディズムの世界の言語であり，そこに民族という近代的な意味合いが加わったことで，イディッシュはあらためて文化的な創造性を持つ，ユダヤ人の民族言語としての地位を確立したと言える。[40] ユダヤ人労働者の生活と文化の基盤を成す要素として，イディシュカイトjidiszkejtの成立である。とはいえユダヤ人ブンド全体がイディッシュ化したわけではない。指導者層の多くは未だロシア化（一部はポーランド化）したインテリゲンツィアから成り，党大会などではロシア語が支配的であった。イディッシュで育ち，ユダヤの伝統的な宗教教育機関イェシバjesziwaでタルムード教育を受けた後，独学でロシア文化に接近したいわゆるpolu-intelligentsiia[41] と呼ばれる層が増えて，徐々にユダヤ人ブンド内部の知的構造に変化が生じ，全体として党のイディッシュ化が進められたと考えられる。党大会が初めてイディッシュだけで開催されたのは，1910年の第8回大会であった。[42]

イディッシュを基礎とするユダヤ人の民族的文化的自治が，ユダヤ人ブンドの政治綱領として確定したのには，1905年革命の渦中でユダヤ人の革命政党としてスローガンを明確化する必要があったことと並んで，いわゆる労働者シオニズムを掲げるユダヤ人諸政党が革命勃発後に続々と名乗りをあげており，これらに対抗する必要に迫られたこともあった。ユダヤ人ブンドは，ブルジョワジーの政治運動だとしてシオニズムを否定するが，それを労働者に植え付けようとする運動が生まれて一部で組織化が進んでいることを認め，危機感を抱いていた。1903年の第5回党大会でユダヤ人ブンドは，労働者シオニズムは階級対立を民族的利害で隠蔽し，その政治的無関心が革命運動を阻害しているため断固これと戦うべしと決議した。[43] 労働者シオニストにとっては，真の階級闘争は未来のユダヤ国家において初めて展開するものであり，ディアスポラの地での運動はある意味で仮のものであり，その方針は労働者の状況改善などの経済闘争に限定されがちであった。ユダヤ人ブンドにとって，ロシア帝国こそが階級闘争の場であり，戦いを通じて労働者そして民族として解放されるのは「イスラエルの地Eretz Israel」ではなく，この地すなわちロシア帝国そのものにおいてである。ここにユダヤ人ブンドの歴史が生んだ新たなユダヤ・アイデンティティを構成するもう一つの要素，ドイカイトdojkejt[44] の概念が定着する。「この地」で，現地社会に文化的に同化することなく，イディッシュに基づくユダヤ人の民族的文化的自治を展開すること，これがユダヤ人ブンドの綱領であり，新たなユダヤ人労働者のアイデンティティを示すものとなった。

4章　ユダヤ人労働者の新たな民族アイデンティティ

ユダヤ人ブンドがユダヤ「民族」の党であると宣言し，独自の民族的要求を掲げて，新たなユダヤ人のあり方，新たなユダヤ人アイデンティティを提示したことは，ユダヤ人ブンド史研究，特に初期のそれのひとつのハイライトである。当初より国際主義の立場を歩んで来たユダヤ人ブ

ンドが，党結成後3年目頃から，ユダヤ人の民族としての要求，民族綱領を掲げる方向に転換したことについて，ユダヤ人ブンドの研究史において，様々な見解が提示されてきた。本稿でもすでに幾つかの見解を援用しながら論を進めてきたが，ここでこの問題での研究史を一瞥する。各モノグラフには各著者なりの観点からの研究史の紹介が成されているが，ここでは比較的明解なカッソフS. Kassowの概説に依拠する。[45]

ユダヤ人ブンドのこの方向転換について，Kassowはおおまかに四つの方向で整理している。一つ目はイディッシュ話者のユダヤ人労働者およびsemi intelectualist[46]の流入が転換を促したとするもので，古典的な説明である。[47] 二つ目は党の少数のエリート指導者が，シオニズムの影響や他の諸党への対抗，ロシア社会民主党内での自党の位置づけなど，様々な要請に対応した結果であるとする説で，これはFrankelが当初の一つ目の立場から修正したものとされる。三つ目は，社会学の内部植民地主義model of internal colonialismおよび分断的労働市場split labour marketの理論を用いてユダヤ人労働者の状況を分析するPeledの立場である。当時のロシア帝国の労働市場において，ユダヤ人労働者は雇用者および非ユダヤ人労働者から文化的に差別されて孤立化し，またその結果労働市場における低賃金のセグメントに追い込まれていた。彼らはそこで徐々に民族的かつ階級的アイデンティティを自覚して『民族的・階級的』意識 “ethno-class” consciousnessを発展させた。その政治的表現がユダヤ人ブンドの民族的イデオロギーとなったと説いている。[48] 最後の四つ目の観点は，すでにこの問題でのひとつの要因として例示したように，PPSとの対立，抗争の帰結としてユダヤ人ブンドが民族的な側面を強化したというものである。ポーランド独立を綱領とするPPSが，ユダヤ人をもポーランド「国民」として組織化を進めるのに対して，ユダヤ人を自立した存在として他の諸民族と同等の関係の中に位置づけるために，理論的に民族的性格を強める方向に進んだというもので，専らポーランド人と共生するポーランド王国やリトアニアの都市部における展開の説明としては有効であろう。[49] これらのどれが決定的だったかはここでは断言しないが，いずれにせよユダヤ人の民族性を強調する流れが生まれ，そこに第二インターやオーストリア社会民主党での民族問題に関する議論が理論的な枠組みを提供したという流れは確認できよう。

このようにしてユダヤ人ブンドの民族理論が形作られていったのだが，研究史上，特にその過程が注目されるのは，そこにロシア帝国のユダヤ人労働者の未来への展望という問題，ユダヤ人としての存在そのものに関わる原理的な問題が映し出されているからである。

素朴な国際主義理論に基づけば，労働者階級は資本主義体制の中で民族的な区別なく一律に搾取されている。従って階級闘争において個別の民族が独自の民族的要求を提出することは，階級闘争の目標を曖昧にするものであり，またナショナリズムが本質的にブルジョワジーの要求と捉えられたために想定されていなかった。1896年の第二インター・ロンドン大会でPPSおよびZZSPがポーランド国家再興を国際社会主義運動の綱領にするよう求めたことで，この問題が改めて議論されることになった。18世紀末のポーランド国家消滅以後，国家再建を目指すポーランド人の戦いは，19世紀の革命運動史においては一貫して自由のための戦いと称賛され，また部分的に社会主義思想とも結びついた。だが民族の自由を求める戦いの正当性が，ユダヤ人にも適用されるかという点で，問題が発生する。既述のように社会主義者世界では，一般にユダヤ人は民族だと考えられておらず，同化が進行すれば消え行く存在と見做されていた。しかしロシア帝国では，ユダヤ人は居住区域の強制を受けるなど現実に法的に差別されており，そこからユダヤ人労働者は階級的にそして民族的に二重に抑圧された存在であるという認識が生じる。ユダヤ人ブンドはこの二重の抑圧を，両方とも資本主義体制に根ざすものとして一元化していた。階級的抑圧から

解放されれば，自動的に民族的抑圧からも解放されるという論法となる。だがユダヤ人ブンドと活動領域が重なるPPSが，ポーランド独立による民族抑圧からの解放（ユダヤ人はポーランド人としてそこに包含される）の図式を提示したことで，ポーランド人には包含されないユダヤ人としての独自の立場を説明する必要に迫られた。また先のPeledの分析に従うと，ロシア帝国の資本主義発展の中で，ユダヤ人労働者は労働市場において疎外された地位に追い込まれ，そこから独特の民族的階級的意識が醸成されていた。更に後に労働者シオニズムと呼ばれる潮流が現れたことが，シオニズムは中小ブルジョワジーの運動だとして切り捨ててきたユダヤ人ブンドに，新たな理論的対応を迫っていた。このようにロシア帝国のユダヤ人は，他の民族とは様々な局面において区別される独自の民族として存在しているという認識が固定し，それに基づき民族としてのユダヤ人の解放を理論化する必要に迫られたのだと結論づけられよう。

もう一つ確認すべき点はユダヤ人は民族であり続けるのかという問題に，一定の方向づけが成されたことである。初期の段階ではユダヤ人を民族として認め，イディッシュを民族言語と認めた。だがユダヤ人は民族として永続的に存在し続けるのかという問題については，明確な意思表示はなされていない。指導層を形成するロシア化したインテリゲンツィアの多くは，暗黙に究極的には同化は不可避と考えていた。このためユダヤ民族の永続性に関して，曖昧な立場（neutralism）を取っていた。民族的要求が具体化していくうちに，ユダヤ民族は永続的に同化しないという観点が徐々に優勢になっていった。イディッシュは永続するユダヤ民族の言語として，ユダヤ人ブンド内部でのイディッシュの地位が高まり，党大会での言語もイディッシュに一元化されるようになる。イディッシュを独自の言語とし，シオニズムによる脱出Exodusを拒絶して「今いる土地」に留まるという方針が，ユダヤ人ブンドの構想するユダイズムの永続性の確信，新たなアイデンティティの形成を導いた。民族的文化的自治は，このアイデンティティを政治的に保障する制度であった。

ユダヤ人ブンドの提示する独自のユダヤ人アイデンティティは，宗教社会としてのユダヤ人共同体の中でどのように位置づけられようか。ドイツのキリスト教社会主義運動のような自発的なものとは異なり，ロシア帝国のユダヤ人の社会主義的労働運動は，宗教的に差別され，民族的に管理・抑圧されている状況の中で発生した。一般に労働者の世界にあっても，正統派の共同体，それを支配するラビンや長老会[50]の影響力は強かった。[51] ユダヤ人ブンドのメンバーが，それらと具体的にどのような関係を維持していたか，具体的な例を挙げて言及するのは難しい。ユダヤ人ブンドの運動に宗教的要素が絡むことはあり得ないが，ブンドのメンバーは制度的にはユダヤ人共同体に属しており，結婚や葬儀などに関わる生活上，宗教上の事柄では共同体との関係は，度合いは様々なれど維持されていた。ロシア化ないしはポーランド化したインテリゲンツィアの革命家については，その多くはユダヤ教自体から離脱しているか，あるいはハスカーラー・改革派のシナゴーグに属していると考えられる。一方労働者の大半は正統派，およびハシディズムに属している。正統派とハシディズムは，共通して同化を否定し，ハスカーラーに敵対した。シオニズムについても同様に，その世俗性，メシア信仰からの逸脱として否定する。また正統派もハシディズムも日常言語はイディッシュである。民族と名付けることはないが，イディッシュを独自の言語として持ち，今いるところで救済を待つという内容は，ユダヤ人ブンドのそれとの親近性は認められる。社会主義の要素を正統派やハシディズムが認めることはあり得ないが，イディッシュを軸に民族的文化的自治のもとでユダヤ文化を維持，発展させるユダヤ人ブンドの方針は，ユダヤ人社会の伝統的な部分から完全には排除されてはいなかったと思われる。独立後のポーランド国家において，ハシディズムの若い世代にもユダヤ人ブンドの影響が及んでいたとの記述は

示唆的である。[52]

結　　び

新天地を目指してロシア帝国から移民するユダヤ人の中に，多くのユダヤ人ブンドの活動家がいた。イスラエルの地（Eretz Israel）ではなく，西ヨーロッパ諸国，アメリカ合衆国，南米の国々に渡った彼らは，ユダヤ人ブンドが築き上げた社会主義的労働者のユダヤ理念，アイデンティティを，移民した先の土地に根づかせた。イディッシュを軸にした文化活動jidiszkeytと労働運動の推進は言うまでもなく，同化とExodusを拒絶して「今，ここで」生き活動するdojkeytという原則が新たな土地へも適用されたことになる。世界化するユダヤ人ブンドの歴史を追ったヴォルフF. Wolffによると，ユダヤ人ブンドのアイデンティティを形作る要素としてイディシュカイトyidishkayt，ドイカイトdoikayt，ハヴェルシャフトkhavershaft，ミシュポヘディカイトmishpokhedikaytの四つの要素を挙げられるという。[53] 対象とする時代と地域が本稿の意図を越える部分もあるが，この四つの要素はユダヤ人ブンドの特質を的確に説明しているとも言える。イディシュカイトは言うまでもなく，すべての原点であり，ドイカイトがその場を提供する。残りの二つ，ハヴェルシャフトとミシュポヘディカイトは，それぞれ仲間意識，共通の家族的帰属意識といったところか。[54] 後半の二つは多少情緒的な印象を与えるが，これを敷延させるとユダヤ人ブンドの結束力と動員力，団結と互助の意識につながるものとも言えよう。加えて党内で，指導者層の多くを形成するインテリゲンツィアの権威は高く維持され，労働者の尊敬の意識は強い。この階層序列は非民主的な印象を与えかねないが，党内での自由な議論を阻むものではなく，全般に党内の秩序は維持されていた。ラビン・長老会を頂点として営まれるユダヤ人共同体の秩序意識が，多少なりとも影響していると考えられなくもない。[55]

ロシア革命後，ロシアとリトアニアのユダヤ人ブンドの大半はロシア共産党の中に吸収され，残りは弾圧によって消滅した。「ポーランドのユダヤ人ブンド」だけが両大戦間期を生き抜いたが，それも第二次世界大戦とホロコーストによって息の根を断たれてしまった。東欧ユダヤ人社会が消失し，正統派もハシディズムも消え去った。jidiszkeytとdojkeytに依拠するユダヤ人ブンドの存在条件は失われ，民族的文化的自治の基盤も消滅した。更にイスラエルの建国が，ユダヤ人ブンドの反シオニズム政策の敗北を決定づけた。ホロコーストを生き延びた少数の党員が戦後，活動の再開を目指すが，まもなくポーランドを覆ったスターリン体制の中で1949年に正式に解党した。

19世紀のポーランド・リトアニアのユダヤ人世界では，西からはハスカーラー，南からはハシディズムという新たなユダイズムが押し寄せてアイデンティティの分化が起こり，ポーランド分割でロシア帝国領となった地域では他の分割領と比べてより強いユダヤ人差別の下にあった。1880年代の大規模なポグロムはユダヤ人社会に恐怖感を醸成した。差別と恐怖から逃れる道としてシオニズムが政治運動として活性化し，他方恐怖と差別の源泉を資本主義制度の矛盾に見い出し，社会主義による解放を目指す革命的労働運動が生まれる。本稿は後者の運動形態の中で，ユダヤ人革命家・労働者がロシア帝国の革命を志向しながら，ユダヤ人は民族であると自覚し，相応の民族綱領を持つようになった過程を跡付けてきた。ロシア帝国の民主的改編を視野におさめ，その中でユダヤ人が民族として自立し，他の諸民族と共存する道筋を民族的文化的自治というスローガンに集約させたユダヤ人ブンドは，jidiszkeytとdojkeytを軸に近代資本主義社会に照応する新たなユダヤ人アイデンティティを構築し，後の時代，両大戦間期のポーランドに伝えたが，実を結ぶことなく消えてしまった。

※本稿は，以下の研究資金による研究成果の一部である。
・科研費：基盤研究(C)「『共生空間』生成を巡る比較研究：ユダヤ教徒の複合アイデンティティを軸として」（課題番号：21K12435：2021-2023年度）
・東京国際大学・特別研究助成「コムニタス的空間の生成／崩壊の比較研究：ユダヤ教徒を巡る共生と排除のメカニズム」（2020年度）

注

1）本稿が扱うのはユダヤ人を中心にした多言語世界であるため，様々な組織名，事項などの原語（どれを原語とすべきか不明な場合もある）併記は最小限に留め，必要に応じ誤解の生じない範囲で，適当な言語で付記する。またイディッシュの転写は，ポーランドで一般的な仕方を踏襲する。

2）拙稿「18-19世紀のポーランド・ユダヤ人におけるアイデンティティの分裂（1）」『東京国際大学論叢人文・社会学研究』第5号，2020, p. 59–70：「改革派ユダイズムの生成と興隆—18-19世紀のポーランド・ユダヤ人におけるアイデンティティの分裂（2）」同誌，第6号，2021，p. 35–47。

3）ウィーン会議で成立した国家で，旧ジェチポスポリタのポーランド王国Koronaとは異なる。会議ポーランドKrólestwo Kongresoweとも呼ばれ，領域はナポレオンが創出したワルシャワ公国Księstwo Warszawskieから西部のポズナニ地方を切り取って残った部分に相当する。ロシア帝国との同君連合国家であったが，1830-31年の11月蜂起後，自治的権限は縮小されほぼ完全にロシア領となる。

4）ユダヤ人ブンドは様々な革命史研究で言及されるが，ユダヤ人ブントそのものを対象とした研究は多くはない。対象とする時代やテーマは様々だが，本稿で多く参照したものを幾つか参考文献として挙げる。Johnpoll Bernard K., *The Politics of Futility. The General Jewish Workers Bund of Poland, 1917-1943,* Ithaca 1967 ; Haustein Ulrich, *Sozialismus und nationale Frage in Polen. Die Entwicklung der sozialistischen Bewegung in Kongreßpolen von 1875 bis 1900 unter besonderer Berücksichtigung der Polnischen Sozialistischen Partei (PPS)*, Köln-Wien 1969 ; Mendelsohn Ezra, *Class Struggle in the Pale. The Formative Years of the Jewish Workers' Movement in Tsarist Russia*, Cambridge 1970; Tobias Henry J., *The Jewish Bund in Russia. From Its Origin to 1905*, Stanford 1972; Bunzl John, *Klassenkampf in der Diaspora. Zur Geschichte der jüdischen Arbeiterbewegung*, Wien 1975; Brym Robert J., *The Jewish Intelligentsia and Russian Marxism. A Sociological Study of Intellectual Radicalism and Ideological Divergence*, London-Basingstoke 1978; Frankel Jonathan, *Prophecy and Politics. Socialism, Nationalism, and the Russian Jews, 1862-1917*, Cambridge etc. 1981; Peled Yoav, *Class and Ethnicity in the Pale. The Political Economy of Jewish Workers' Natinalism in late Imperial Russia*, Basingstoke-London 1989; *Bund. 100 lat historii 1897-1997*, Warszawa 2000; Pickhan Gertrud, *»Gegen den Strom«. Der Allgemeine Jüdische Arbeiterbund »Bund« in Polen 1918-1939*, Stuttgart-München 2001; Zimmerman Joshua D., *Poles, Jews, and the Politiics of Nationality. The Bund and the Polish Socialist Party in Late Tsarist Russia, 1892-1914*, Madison (Wisconsin) 2004. 1960年から1981年にかけて*Di geszichte fun bund. 1-5 band* (Yidd., Amherst-Massachusetts) が出版されているが，本稿では参照していない。邦語での研究史においては，ユダヤ人ブンドは専ら革命運動史や思想史の研究で副次的に扱われてきた。西村木綿氏の学位論文『ユダヤ人ブンドの文化的民族自治論とイディッシュ世俗学校運動（1897 ～ 1939年）』（2016年，京都大学；要旨のみ披見）は，この点で重要な研究であり，一部は公表されている（注36および39を参照）。特にイディッシュ普及に関する後半は，本稿との関わりは薄いが，画期的なものと評価できる。

5）Черта оседлости. 他の言語では strefa osiedlenia, Ansiedlungsrayon などと表記され，英語文献ではPaleが一般的である。

6）ユダヤ人人口については，通常1897年のロシア帝国のセンサスに基づくが，その統計処理については文献ごとにまちまちなところもある。本稿で参考にしたのは，Polonsky Antony, *The Jews in Poland and Russia. Vol. II*, Oxford-Portland 2010, p. 198–211 (Statistical appendix); *Historia Polski w liczbach. Tom I*, Warszawa 2003; *Atlas historii Żydów polskich*, Warszawa 2010, s.190-192，およびその他のモノグ

ラフである。

7）各地域のハスカーラーの進展については，前掲拙稿「改革派ユダイズムの生成と興隆・・・」を参照。

8）ポーランド分割を挟む数十年間のユダヤ人人口動態，おおまかな職業分布については，zob. *Żydzi w Polsce odrodzonej. Tom 1*. Warszawa 1932のCzęść I-4およびCzęść 3-19.

9）ロシア領のユダヤ人工業労働者の被雇用形態については，ref. Brym R., *Yakov Leshchinsky and The Jewish Worker in Russia*, in: Leshchinsky Yakov, *The Jewish Worker in Russia*, Bloomington 2018, p. ix ff.

10）PPSおよび後述のSDKPの成立の過程は，時間的，人脈的にかなり入り組んでいるが，煩雑になるので省略する。詳しくは，拙稿「ポーランド王国の労働運動における二つの潮流の形成について（1878-1893）」『一橋研究』8巻1号，1983，p. 44–59を参照。

11）Piasecki Henryk, *Żydowska Organizacja PPS*, Wrocław itd. 1978, s. 34.

12）Bergman Stefan, *Przyczynki do historii Bundu*, “Biuletyn Żydowskiego Instytutu Historycznego”, 1992, nr 162, s.116.

13）*tamże*, s. 235.

14）1895年頃から，ユダヤ人党員からイディッシュ文書を要求する書簡が繰り返し党指導部に出されるが，指導部は理解を示さない。zob. *Materiały do historii P. P. S. i ruchu rewolucyjnego w zaborze rosyjskim od r. 1893-1904. Tom I. Rok 1893-1897*, Warszawa 1907, s.161-162; *tenże. Tom 2*, Warszawa 1911, s. 218 ff.

15）*Materiały do historii P. P. S. ... Tom I.* , s. 288-289 ; Piasecki H., *op. cit.*, s. 30. 1902年の第6回党大会で，PPSはユダヤ人ブンドへの対抗のため，再度ユダヤ人党員の組織化を決定した。ユダヤ人組織Organizacja Żydowskaとして党内の自立組織として再出発した。先のユダヤ人部門も含めて，名称は規約に基づくものではなく，通称である。

16）1903年6月（あるいは7月）の第5回大会（Zürich）で決議された，ロシア社会民主党内のユダヤ人ブンドの地位に関する規約草案。Ref. Tobias H., *op. cit.*, p.201 ff.決議草案に対するレーニンの反応は，レーニン「ブンド民族主義の最新の言葉ユダヤ人労働者に訴える」『レーニン全集』第6巻，p. 533 ff.

17）この論争については，レーニン「ブンドの声明にかんして」『レーニン全集』第6巻，p. 327 ff.;「党内におけるブンドの地位」同第7巻，p. 82 ff. 等を参照。

18）1895年頃に壊滅状態に陥ったSDKPは，1899年から1900年にかけてリトアニアの組織を加えたSDKPiLとして再建された。

19）SDKPiLは本来，民族原理に基づく党組織原理は認めておらず，その点ではロシア社会民主党の立場に与し，ユダヤ人ブントとは対立する。しかし論争の過程でSDKPiLをポーランド人の党，ロシア社会民主党をロシア人の党と表現するような議論が現れたりもして，議論は錯綜していたことも事実である。この間の問題は，拙稿「ポーランド王国リトアニア社会民主党の民族理論形成史上の一局面（1899-1901）—民族のエトスと国際主義のイデア—」『東欧史研究』第7号，1984，p. 1–31を参照。

20）ポーランド社会党プロレタリアート。第3次プロレタリアート党（プロレタリアート党は1880年代のポーランド人の革命組織）とも呼ばれる。指導者はクルチツキLudwik Kulczyckiで，社会民主主義に近いが，反面テロ戦術を重視した。クルチツキについては，拙稿「L.クルチツキの思想と行動」『一橋論叢』96巻1号，1986，p. 31–48を参照。

21）PPS-Proletariatは組織的には弱小であり，労働運動での勢力関係に影響を与えるほどではなかったが，ユダヤ人ブントとの関係はPPS-Proletariatが消滅した1908年まで続いた。Vgl. Pickhan G., *op. cit.*, S. 68.

22）Mendelsohn E., *op. cit.*, p. 139 ff.

23）1890年代から活動していた「ポアレイ・シオンPoalej Syjon」（シオンの労働者）に続いて，1905年革命期には，未来のユダヤ国家の場所として「イスラエルの地Eretz-Israel」にはこだわらない，地域主義者territorialistsと称された「シオニスト社会主義労働者党」や，社会革命党（エスエル）に近い「社会主義者ユダヤ人労働者党」などが生まれた。Ref. Mishkinsky Moshe, *The Jewish Labor Movement and European Socialism*, “Journal of World History”, II (1968), (https://www.marxists.org/subject/jewish/jewish-labor-socialism.pdf).

24）以前の対立点が解消されないままに合同がなされたことに，ユダヤ人ブンドの党内からの反発もあったことが，合同が決議された1906年4月のロシア社会民主党第4回大会の後に開催されたユダヤ人ブン

ド第7回大会の議事録からも明らかである。党大会は，合同規約にユダヤ人ブンドの本来の要求に反するような様々な問題があると認めつつも，これを合同の移行時の一時的形態（eine Übergangsform der Vereinigung）として，様々な留保付きで合同を承認した。Vgl. *Der siebente Parteitag des Jüdischen Arbeiterbundes*, “Die Neue Zeit”, Jg. 25 (1906/07), Heft 3, S. 100-101.

25）Pickhan G., *op. cit.*, S. 61.

26）コミンテルン加入をめぐって党内対立が激化し，1921年に加入支持派が脱退し，翌年「ユダヤ共産主義労働者同盟（通称コムブンド）」を結成し，コミンテルンに加入した。しかし民族別の党組織を認めないポーランド共産党（KPRP; SDKPiLとPPS-Lewicaが合体して1919年に末に結成された）やコミンテルンに翻弄されて最終的にKPRPに吸収され，一部は元のユダヤ人ブンドに戻った。Vgl. Bunzl J., *op. cit.*, S.151-152,

27）これについては，R. ルクセンブルクの学位論文の翻訳に付された訳者の「解説」を参照。ローザ・ルクセンブルク『ポーランドの産業的発展』（肥前栄一訳），未来社，1970。

28）ブリュン党大会で否決はされたが，南スラヴ人代議員による「民族的マイノリティの民族的文化的自治」の提案がユダヤ人ブンドの民族理論形成に影響したとする見方は一般的である。Vgl. Pickhan G., *op. cit.*, S. 47.

29）Vgl. Pickhan G., *op. cit.*, S. 46 ff.; Brym R., *op. cit.*, p. 82.

30）Haustein U., *op. cit.*, S. 244.

31）Haustein U., *op. cit.*, S. 245から引用したため各用語にドイツ語を付加したが，ここでの「民族」のロシア語の原語は“национальность”である。Sieh Pickhan G., *op. cit.*, S.46.

32）再建直後のSDKPiLは，ユダヤ人ブンドに先立って1900年8月の第2回大会で，民族自治・連邦制に基づく将来のロシアの立憲国家構想を採択している。前掲拙稿「ポーランド王国リトアニア社会民主党の民族理論形成史上の一局面・・・」を参照。ブリュン綱領以降，専制国家の民主化の枠組みとして，社会民主主義の革命政党のみならず，広汎な政治勢力に「自治・連邦」構想が流行していたことが窺われる。

33）カウツキー（および一部バウアー）の理論については，相田慎一『言語としての民族・カウツキーと民族問題』2002が詳しい。

34）Bauer Otto, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*, Wien 1907, S. 320-328 ; 邦訳『民族問題と社会民主主義』2001年，p. 308–319.

35）Vgl. Kautsky Karl, *Die moderne Natinalität*, “Die Neue Zeit”, Jg. 5, 1887 ; ders., *Nationalität und Internationalität*, “Ergänzungshefte zur Neuen Zeit”, #1, 1908 ; 相田慎一『言語としての民族・・・』p. 243 ff.

36）ユダヤ人ブンドの民族理論形成過程は，大筋，当時のマルクス主義者の間での議論と関連付けて考察されてきた。議論は主にドイツ語圏で展開されたため，資料的にもドイツ語が主流であった。前掲の相田慎一『言語としての民族・・・』は専らドイツ語文献に依拠した研究である。これに対し西村木綿「民族の［自決］とは何か【ユダヤ人［ブンド］の問いをめぐって】」『社会思想史研究』No.39 (2015), p. 131–149は，イディッシュ文献に依拠してこの議論に新たな考察の軸を与えた。

37）レーニン「ユダヤ人労働者に訴える」『レーニン全集』第8巻，p. 501。

38）Vgl. Pickhan G., *op. cit.*, S. 47 ; Frankel J., *op. cit.*, p. 246 f. ; Heller Klaus, *Revolutionärer Sozialismus und nationale Frage. Das Problem des Nationalismus bei russischen und jüdischen Sozialdemokraten und Sozialrevolutionären im Russischen Reich bis zur Revolution 1905-1907*, Frankfurt a. M. 1977, S. 162 f.

39）Mendelsohn E., *op. cit.*, p. 118；イディシズムについては，西村木綿「両大戦間期ポーランドにおけるイディッシュ世俗学校運動の生成と展開—文化的民族自治，イディシズム，学校共同体」『東欧史研究』第37号（2015），p. 4–5を参照。

40）1908年8-9月にウクライナのチェルニォフツェ Czerniowce (現Чернівці)で，イディッシュをめぐり様々な分野の代表による会議が開かれた。ヘブライ語派とイディッシュ派の間の論争の末，イディッシュをユダヤ人の民族言語とする決議がなされた。強制力はないが，以後のイディッシュの発展に大きく寄与したとされる。zob. *Polski słownik judaistyczny. Tom 1*. Warszawa 2003, s. 815 f.一般にシオニ

ストはヘブライ語との結びつきが強いとされるが，労働者シオニズムのPoalej-Syjonの指導者ボロホフDow Ber Borochowはイディッシュ主義者として知られ，ヘブライ語派に対抗していた。イディッシュはユダヤ人の生活言語として他の言語を圧倒しており，党派関係を絡めると問題は複雑である。

41）Frankelが自著（*op. cit.*）において多用し，意味は本文の通りであるが，語源は未だ不明。後の研究での使用例はある。例えば，Zimmerman J., *op. cit.*, p. 82.

42）Pickhan G., *op. cit.*, S. 48.

43）*Die Tätigkeit des Allgem. Jüdischen Arbeiterbundes in Litauen, Polen u. Russland (“Bund”) nach seinem V. Parteitag. Bericht für den Internationalen Sozialistischen Kongress in Amsterdam*, Genf 1904, S. 26.

44）イディッシュのdo「ここ」に基づく語で，hereness, Hiesigkeitなどの訳語が与えられている。

45）Kassow Samuel, *The Historiography of the Bund*, “Polin. Studies in Polish Jewry”, Vol. 29, Oxford-Portland 2017, p. 131 ff..

46）Frankelが用いた “polu-inteligentisiia” の言い換えであろう。注(41)を参照。

47）Kassowは，この方向の例としてユダヤ人ブンドの党員の回想や研究，Ezra Mendelsohn, Henry Tobias, それに初期のFrankelを挙げる。

48）Peled J., *op. cit.*, p. 111 ff.

49）この説は上述のM. Mishkinskyが提起し，J. Zimmermanが前掲書において，それを継承している。しかしZimmermanは「PPSとの論争の影響」という前提を越えて，「PPSそのもの」がユダヤ人ブンドという党に影響を与えたかのように拡大解釈をしている。

50）ユダヤ人共同体における有給有期の指導者。尊称としてのラビと区別するため，ポーランド語では常用されるラビンrabinと表記する。長老会senioratはラビンを筆頭に常設される，共同体の執行機関。

51）ハシディズムの場合には，それぞれの派の宗家dynastiaを代表するツァディクcadykが絶対的な権限，支配権を持っている。

52）Nowogródzki Emanuel, *Żydowska Partia Robotnicza Bund w Polsce 1915-1939*, Warszawa 2005, s. 347.

53）Wolff Frank, *Neue Welten in der Neuen Welt. Die Transnationale Geschichte des Allgemeinen Jüdischen Arbeiterbundes 1897-1947*, Köln usw. 2014, S. 30-38, 300 ff. ここでは引用のため，綴りは原文のままとした。

54）Kassowはそれぞれに “comradeship”, “belonging to a common family” という語句を与えている。Kassow S., *op. cit.*, p. 136.

55）この問題はまだ研究テーマとしては成立していないが，伝統的な宗教共同体から自立，離脱するという近代化論的テーマは存在する。zob. Guesnet François, *Chevrot i achdes. Zmiana w żydowskiej organizacji wewnętrznej w Królestwie Polskim przed 1900 r. oraz powatania Bundu*, w: Bund. 100 lat historii 1897-1997, s. 71-79.